

熊本大学広報誌

熊大通信

KUMADAI TSUSHIN

Apr.2005

Vol.16

特別企画

法人化2年目を迎えて

〈 新たな熊本大学への挑戦 〉



特集

特別な個性を持った子どもたち

～発達障害児に対する特別支援教育を考える～



～あなたのための熊本大学～

熊本大学は、4つのことに全力を投入します！

- Upgrade 未来を生き抜く人材の養成
- Unique 新たな知的価値の創造
- Union 地域連携と地域貢献
- Universal 留学生教育と国際貢献

CONTENTS

〈目次〉

法人化2年目を迎えて

～新たな熊本大学への挑戦～

熊本大学長 崎元達郎



P.1

P.1

知と社会 Vol.16

特別な個性を持った子どもたち

～発達障害児に対する特別支援教育を考える～



P.5

P.5

夢の実現

「声をつくり出すシステムを開発」

熊本大学工学部電気システム工学科 助教授 緒方 公一



P.10

P.10

熊大群像

「ボランティアで不登校の子どもたちをサポート」

ユア・フレンドの学生たち



P.12

P.12

卒業生を訪ねて

「美術館は、自分の感じる心を思いだし、育てる場所」

坂本善三美術館 学芸員 山下 弘子さん



P.14

P.14

国際交流事情 ～国際総合大学としての熊本大学～

「頼れるチューターが存在」

ドイツ出身 オリヴァー・ブリキトヴィッツさん/チューター 森高敬祐 大学院文学研究科2年生

韓国出身 リュ・ミラさん/チューター 森 綾香 法学部2年生



P.16

P.16

熊大INCEMATION

P.18

法人化2年目を迎えて

〈新たな熊本大学への挑戦〉

熊本大学長 崎元達郎

先の見えない中の制度設計に基づいて出発した国立大学法人熊本大学も、地域社会のご支援や構成員全員の頑張りにより、初年度を当初計画した成果を上げて終えることができた。2年目を迎えるに当たり、初年度の取り組みを振り返りつつ、学長としての大学の発展のビジョンと、それを達成するための課題についてお伝えしたい。



■教育について

大学にとって、教育の質が、その組織の命である。

教養教育においては、「IT環境を用いた自立学習支援システム（15年度）」と「学習と社会に扉を開く全学共通情報基礎教育（16年度）」の2つの特色ある大学教育支援プログラム（GP）の採択、コンピュータ支援語学教育（CALL）システムの活用と外部試験（TOEIC）の成績評価への導入等により、情報リテラシー教育と英語教育の質が確実に向上した。今後、キャリア科目等の充実を図りながら「21世紀熊本大学教養教育プログラム」の実施、検証、改善を継続することが重要である。

専門教育では、16年度から開始した理学部と法学部の一学科制のカリキュラムの実施と検証が求められる。文学部においては、今年度からコミュニケーション情報学科が設置され、新入生を迎え入れた。英語コミュニケーション能力だけでなく、課題の発見、分析、企画等にも力を有する国際的な人材養成を目指す。

工学部においては、今年度から「ものづくり創造融合工学教育事

業」の予算が認められ、全学運用定数を用いた「工学部附属ものづくり創造融合工学教育センター」を発足させる。理論、材料、製造技術等、「ものづくり」に関する「すり合せ」を含む総合的能力を有する人材養成を目指す。工学部の各学科は既に日本技術者教育認定機構（JABEE）若しくはISO14001の認証取得をしており、世界標準の教育の質保証を達成しつつある。JABEEの教育改善システムは国際標準に準拠しているので他の学部も参考にすべきことが多いと考えている。

薬学部においては、薬剤師養成のための6年制課程（新学科）の18年度設置に向けてカリキュラムの研究と準備が行われる。実務家教員確保のための全学運用定数の活用と附属病院の理解と協力を得ながら病院実習指導体制の整備が必要である。薬学部のもう一つの使命は、創薬とそれを支える基礎研究であり、その道で活躍できる人材養成も同時に成されねばならない。そのための創薬研究センター（仮称）も検討中である。薬剤師と創薬開発人材の養成をバランス良く成し遂げるといふ課題へのチャレンジが開始される。

大学院教育について言えば、16年度に法曹養成研究科がスタートしたが、「専門職大学院形成支援プログラム」において採択された3件（全国最多）のプロジェクトをバネに実務家教員を含む教員と動機十分の学生の協働による努力が継続されている。学長裁量経費等により完成した電子収録装置を備えた模擬法廷等を活用して理論と実務に優れた修了生（2年短縮コース）を送り出し所期の結果がもたらされることを期待したい。

また、自然科学研究科では大学院重点化に向けた改組を18年度に行う計画であり、修士課程の学生定員増と衝撃エネルギー、生命環境、ナノ創成の3つの新講座からなる新領域科学専攻の設置等により教育研究の充実が図られる。

教員養成についても専門職大学院の必要性が中央教育審議会で検討されていることから「教員養成推進プログラム」の採択とそれをバネにした専門職大学院の設置に向け万全の備えをせねばならない。

また、人文社会科学系の大学院にあつては、社会文化科学研究科の区分制への移行を含めて統合・再編の在り方の検討を開始する必要がある。

以上、教育における共通のテーマは「教育の継続的改善と質の保証」であり、年度計画におけるキーワードを並べれば、「双方向型授業」、「プロジェクト・ベーストラーニング（PBL）」、「eラーニングの導入」、「厳格で一貫した成績評価」等である。

eラーニングの導入については、ここ数年、高度情報化キャンパスの構築と歩調を合わせて各部署での取組に対し積極的に学長裁量経費等での支援をしてきたが、さらに全学的な支援体制の充実を行う必要があると判断した。そこで全学運用定数3を充当して、総合情報基盤センターの関連部門を増強する。ここには、インストラクショナルデザイナー（IT（情報技術）、ID（システム論的教育手法）、IP（ネットワーク上の私権）、IM（教育経営））の専門家を採用する計画である。そして、この専門家を中心にeラーニングのコース設計、コンテンツ作成、運営を行うことができる高度なeラーニングプロフェッショナルを養成する修士課程の設置（日本初）を目指す。また、eラーニングと並ぶメディア活用教育の点では、18年度から放送大学熊本学習センターが本

学に移設されることから、本学の教育との連携を図る計画がある。

また、教育に関する新しい施策として、国際活動に関する学生奨学金制度を今年度から開始する。これは、各学部、研究科でプロジェクトを企画していただき、全学で75名程度の学生が海外で活動いただくための奨学金で、海外での研究発表・研究・研修（インターンシップ）の実施などに大いに活用願いたい。

■研究について

大学は、新たな「知」の発見、創造をもって、社会に貢献するところに、その存在意義がある。

研究については、発生医学、衝撃エネルギーに関する2つの21世紀COEに遺伝子改変マウスに関する研究を加えた3つの拠点形成研究Aの他、10の拠点形成研究Bを全学として支援してきた。発生医学のCOE（田賀プロジェクト）は昨年最高級の間評評価を得た。本年は、衝撃エネルギーのCOE（秋山プロジェクト）が中間評価を受ける。この2つのCOEの成果を将来的に融合し、世界初の「バイオエレクトロクスセンター（構想）」と

して飛躍させたいと考えている。

さらに、17年度から予算化される「新興及び再興感染症」に関する研究事業と「ナノスペース電気化学」に関する研究事業が本学の拠点研究として広がりを見せていくことが期待される。特に感染症研究は医学薬学研究部のグループと「エイズ学研究センター」をはじめとする生命系の3センターの協力に加え、4月から設置される化学及血治療法研究所からの寄附講座が偉力を発揮してくれるものと期待している。

また、中小企業基盤整備機構の熊本大学連携型インキュベータが17年度中に完成予定であり、熊本県・市と連携して特に生命科学系研究に基づく起業化が促進されることが期待される。

研究における課題は、科学技術研究費補助金等競争的外部資金の獲得増と本年度中間評価を受ける「大学的財産本部整備事業」の国際化を含む充実である。厳しい予算の中での研究費の確保は重要な問題であるが、いずれにしても外部資金で内部資金減を補い、さらには新しい施策に打って出る資金力を蓄える必要がある。知的財産創生推進本部にしても3年後に

は、補助金無しになるので特許等のロイヤリティで自立しなければならぬ。

■地域社会貢献と国際化

大学は、地域社会、国際社会の一員として、そこに「知」の創造をもつて貢献することが期待されている。

地域社会貢献については、14年度から実施し16年度で終了した地域貢献特別支援事業も定着し評価を得ているところであるが、この実績をさらに発展させるために「政策創造研究センター」をこの4



ノッティンガム大学にて

月にスタートさせた。これにも獲得予算と全学運用定数3を投入しているが、人文社会科学系を中心に生命科学系、自然科学系と融合する形でのシンクタンク的研究の実をあげ、政策提言等の地域貢献と将来的自立が期待される。

国際化については、中国・韓国等の3大学との新規大学間交流協定、6つの新規部局間交流協定を締結するとともに、日英高等教育に関する協力プログラムに参加し、ノッティンガム大学との連携協力の糸口を作ることができた。

今年10月には、熊本大学フォーラムを上海で開催するべく、工学部を中心に全学で取り組みたいと考えている。来年度は韓国で、3年後には欧米でと海外フォーラムを続けて行きたいと考えている。

また、このような教育研究の世界展開を可能にするために国際戦略室を設置し補強することとし、国際交流ネットワークを構築することを検討している。国際戦略室には、キャリア支援課長の民間登用に続き、学外からの公募を検討し、国際交流ネットワークの構築には、本学ゆかりの研究

者を海外アソシエイトとして任命し活躍いただく仕組みを考えている。

■大学運営

国立大学法人となった大学は、自らの責任で経営し、未来へ向かって投資をしていくことが重要になっている。

平成17年度予算については半数以上の大学が減の中、32億円増（施設整備費23億円増の他、病院収入、外部資金等の見込み増を含む）となっている。

事業費ベースでは、3億円増であるが、そのうち、1億6千万円を部局に、1億4千万円を重点配分経費・学長裁量経費に配分した。重点配分経費は、副学長の所掌事項に対応させて教育、研究、大型設備、国際交流、地域連携、広報とし、使途を明確にし、迅速な実施を可能にした。

部局への直接配分は、16年度比3・8%増、15年度比約5%減であるが、間接的に部局に配分されるものを含めるとほぼ法人化前の水準になったものと考えられる。

病院の2%経営改善（毎年3億円収入増）については、病院教職

員の懸命な努力にもかかわらず、このままでは数年後の継続的達成が難しい状況である。経営改善係数の問題が附属病院ひいては大学の使命の達成に支障を生じさせるという問題については、病院を持つ他の大学も同様の状況であるので、データの分析を踏まえ、国立大学協会等を通じて、財務省等に訴えて行く必要があると考えている。

人件費、給与等に関係する課題が2つある。教職員の活動評価に基づくインセンティブの導入と全国共通俸給表の水準を5%程度引下げる方向で検討されている今年的人事院勧告への対応である。

16年度試行の個人活動評価は、17年度の見直しを経て18年度本実施の予定であるから、インセンティブへの反映は部分的前倒しはあり得るものの、19年度からと考えているので、御理解をいただきたい。

施設整備については、全国的に厳しい状況であるが、図書館の拡張と放送大学熊本学習センターとの合築の予算が認められ、17年度中に竣工、18年度に供用となる。

黒髪南地区建物改修完成時（19年度）には、工学部1号館の1階及び、2階に理・工・自然科学系の

事務部、施設部、学術研究協力部等が入る予定である。

その時点でのスペース活用として、eラーニングコンテンツ作成のためのスタジオ等の整備や政策創造研究センターの拡充等が可能になると考えている。

発生医学研究センターの新棟が完成すれば、現在の発生医学研究センターの建物を改修し、保健学科の新展開に備えねばならない。

病院の中央診療棟が完成すれば、次は東病棟の建設が願いだであるが、郵政民営化や財政投融資の行方にも関係する事項であり、経営的視点も加えた、粘り強い対応が必要となる。

思いつくままを述べてきました。が、すべてを言い尽くせない点、御理解をいただきたい。しかし、ここに述べた成果や施策はすべて構成員の努力と英知に支えられており、心から感謝しています。

最後に本学運営の基本方針（7項目）を示しておきたい。

- (1) 学問の自由、大学の自治の理念を踏まえた自主性、自律性、公明性の確保
- (2) 教育研究の長期性や社会と大

学の持続的発展の視点の重視
「将来像」、「目標・計画」の堅持と
確実な実現

(4) 構成員の創意と構成員間のビジョン・目標・情報の共有に基づいて戦略的トップマネジメントと教員・職員の一体的協働

(5) 学生とその活動の尊重と手厚い支援

(6) 教育の機会均等、基礎研究、先端医療、地域医療など競争や経営になじまない部分の重視と堅守

(7) 教職員の意識、意欲、能力、豊かな人間性、夢を醸成する条件整備
法人化2年目を迎えるにあたって、学内外の皆様への御理解とさらなる御支援をお願いします。



工学部百周年記念館（平成16年3月竣工）

特別な個性を持った 子どもたち

発達障害児に対する特別支援教育を考える

発達障害という言葉を、最近、マスコミでもよく見かけるようになった。

従来は、個性のばらつきや、親のしつけのせいとされ、

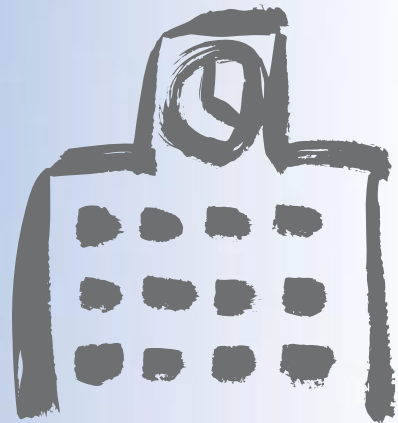
本人も家族も周囲も困りはてることの多かった子どもたちの問題。

それを、発達障害としてとらえなおし、特別なサポートをして、

社会全体で支えていこうという機運が高まっている。

昨年12月、国会で『発達障害者支援法』が成立。

また、小・中学校では、文部科学省が進める『特別支援教育』への取り組みが始まっている。
動き始めた教育と医療の現場を、熊本大学の活動を通して見つけてみる。



特別な配慮が必要

学校では、今日も、さまざまな子どもたちの個性が光っている。廊下を元気に走り回る子、大きな声で先生に話しかける子、それを、にこにこ穏やかに見守る子。中には、いつも落ち着きが無く、毎日、忘れ物が絶えない子、先生のお話をしっかりと聞くことができない子、融通が利かず杓子定規に物事を運ぼうとする子、かたや、カレンダーや時刻表を丸暗記している子もいる。

ところが、先生がいくら注意しても、注意力が散漫になったり、座っていることができず、教室を飛び出してしまいう子もいる。相手の気持ちに対して、うまく配慮できない子、こだわりが強すぎて、友達としゃべり喧嘩になる子、努力しても学習が進まない子もいる。最近では、これらの子どもたちの抱える問題の一部が、脳の機能の軽度発達障害による可能性が示され、また、その割合も、かなり多いことがわかってきた。

従来、学校では、視力・聴力に障害のある子や、言葉や知力が遅れている子どもに対しては、特殊教育が行われてきたが、軽度発達障害の子は、知的能力が平均か、平均以上であることも多いため、親や学校でのしつ

けの問題だとか、本人の自覚の問題など、個性の問題として片付けられ、特別な配慮が払わ

れることは少なかった。

しかし、このような子どもたちの持つ問題を障害としてとらえ直し、教育の中でも、社会の中でも、特別な配慮を払うほうが良いという考え方が欧米を中心に広まり、日本でもようやく『発達障害者支援法』という法律が作られ、今年4月から施行される。

この法律では、広汎性発達障害(自閉症スペクトラム)(※1)、学習障害(LD)(※2)、注意欠陥多動性障害(ADHD)(※3)の3つを対象とし、その早期発見や乳幼児から成人に至るまでの支援を、国や自治体の責務としている。保育、教育、就労、地域生活の各分野での体制づくりがこれからの課題だ。

個性として許容されない場合にも問題が顕在化

「血圧が200にもなるなど明らかに症状がある場合は分かりやすいのですが、問題は軽度の発達障害です。いじめや不登校、引きこもりなどの悩みを持つお子さんをよく診ると、発達障害がみつかる場合があります。障害が原因で、人とうまくやっ

っていけない、授業が分からないなど二次的な問題が生じるケースですね」と語るのは、熊本大学教育学部で障害児病理を教える精神科医の緒方明教授。現在大学病院や熊本県精神保健福祉センター、情緒障害児短期治療施設などで、発達障害児の診断やカウンセリングを行っている。



Akira Ogata

教育学部教授

緒方 明



自閉症は言葉の遅れなどで通常3歳児健診までに発見されるが、その後集団生活を始めてから症状が出る発達障害も少なくない。「高機能自閉症やアスペルガー(※4)の中には、個性が強いといわれながら一生分らない人もいます。また、ADHDの男の子などは、ワンパクとして片付けられていることもあります。それでも社会にうまく適応できていけば、全く問題はないわけです」。

しかし、障害そのものより二次的な問題が深刻な場合もある。「虐待につながるケースもあります。自閉症の子は夜泣きをする、ADHDの子は言っても聞かないなど育てにくいいため、親もつい厳しくなる。また、周りからはしつこい悪影響などと言われる親が悩む。ですから、発達障害があると分かった場合、我が子の障害を受け入れられない方がいる一方、分かって楽になる方もおられます」。しかし、いずれにしても、教育現場や地域社会の理解がなければ、状況を改善できないことだけは変わらない。

「教育者はもちろん社会全体が、ひとつの機能障害として発達障害を知っておくことが大切です。マスメディアも最近よく取りあげていますが、私たち大学でも公開講座やインターネットなどで啓発活動を始めています。体制整備としては、医療、福祉、教育の連携が重要。社会全体でのトータルな対応が必要です」と、緒方教授は語る。

深まる医療と教育の連携

「近年、大学病院の外来でも軽度発達障害の患者さんが増えています。私たち医療の側も、患者さん

のニーズに突き動かされて、診断だけでなく教育面も含めた治療を、学校や保護者と一緒に始めています」と語るのは、熊本大学大学院医学薬学研究所の松倉誠助教授。

「たとえば、ADHDでLD傾向もある場合、先生や親の話が聞けない、すぐに忘れるなどで学習障害がどんどん悪化するお子さんがいます。そういう場合は、集中させる薬がかなり有効です。薬を使うことで、『集中できない』『勉強が分からない』『嫌になる』『勉強しない』という悪循環を、『話が聞ける』『分かる』『楽しい』『勉強しよう』という好循環に転換させる。『良いサイクルに変われれば、対人関係や成績も改善し、本人もプライドを取り戻せます。しかし、この場合も、本人の特性を踏まえた家庭や学校での教育的対応がなければ効果は上がりません。薬物療法と環境調整の二本柱が有効なのです」と、松倉助教授は医療と教育の連携の重要性を指摘する。

また、注意欠陥優位タイプのADHDやLDが小学校中学年頃から次第に学習不振という形で現れるケースもある。「こういう子をできるだけ早く発見するシステムも必要です。学校では身体検査は定期的に行いますが、子どもの心の発達の把握はゼロに等しい。子どもが元気をなくし、面白いことがなくなり、やがて問題が出てくる。それが潜行して突発的な非行につながることもあるわけです。であれば、子どもの生活の質、例えば、学校に楽しく行っているか、友だちとの関係はどうか、睡眠はしっかり取れている



Makoto Matsukura

大学院医学薬学研究所助教授

松倉 誠

フィードバックして実用化への研究を進めている。今後は、それを元に小学校版も開発していく考えだ。「発達障害というと、犯罪などと

※1 広汎性発達障害(自閉症スペクトラム)

他人との社会的関係の形成が困難、言葉の発達の遅れ、興味や関心に偏りがあり特定のものにこだわるなど自閉症に共通する障害がみられるものをいう。

※2 学習障害(LD)

読む、書く、計算する、聞く、話す、推論するといった能力のうち、特定分野の習得が困難な障害をさす。原因が中枢神経の何らかの機能障害と推定されるもので、視聴覚障害や知的障害、しつけなどの環境要因によるものを除く。

※3 注意欠陥多動性障害(ADHD)

注意や集中が適切でない「不注意」、興味や関心が移りやすく落ち着きがないなどの「多動性」、欲求のままに行動する「衝動性」などが見られる。また、同じADHDでも不注意優位型と多動性・衝動性優位型、混合型などがある。

※4 高機能自閉症・アスペルガー症候群

広汎性発達障害(自閉症スペクトラム)のうち、知的障害が伴わないものを高機能自閉症、また、言葉にも問題のないものをアスペルガー症候群と呼ぶ。

※5 QOL

Quality of Lifeの略。人々の生活を物質的な面から量的にのみとらえるのではなく、精神的な豊かさや満足度も含めて、質的にとらえる考え方。生活の質。

結び付いた偏ったイメージが伝わりがちです。しかし、実際には素晴らしい才能を持ち、それを生かしてハッピーに生きている人もたくさんいます。アインシュタインやビル・ゲイツもアスペルガーと言われていきますね。子どもの才能を活かすか潰すかは育てる側にかかっています。本人も我々も希望を持って治療や対応に当たりたいですね」と、松倉助教授は障害児支援の重要性を説く。

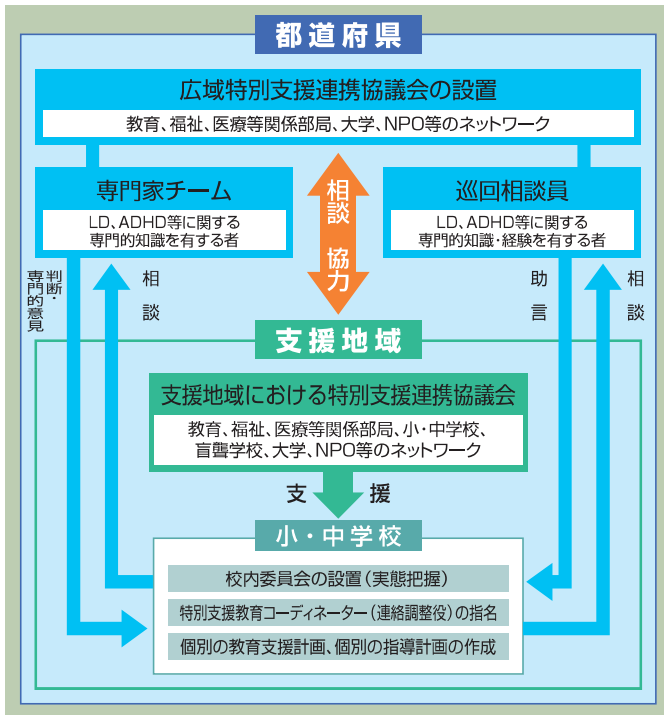
特別支援教育が始動

では、学校現場ではどんな動きがあるのだろうか。平成15年、文部科学省は、従来の盲聾・養護学校、特殊学級などを中心とした特別教育から特別支援教育へと大きな方向転換を示した。これまで特別教育では対象とならなかったLD、ADHD、高機能自閉症も含めて、障害のある児童生徒に対して一人一人のニーズを把握し、適切な教育的支援を行っていくというものだ。

「一昨年度文部科学省は、知的遅れはないが特別な教育的支援を必要とする児童生徒が、かなりの割合いる可能性があるというデータを発表しました。現在は、昨年出されたガイドラインに基づいて特別支援体制のモデル事業が各県で行われています(図1参照)」と語るのは、県の巡回相談員として学校現場に入り、大学ではLD児等の教育的支援の研究も行っている熊本大学教育学部の千川隆助教授。

「モデル事業では、学校内の委員会と専

図1 支援体制の全体図



門家チームの二段階で体制を組み、問題のある子どものような支援が必要か検討していきます。たとえば、認知的偏りがある子がいる教室では、言葉だけでなく黒板にも書いて伝わりやすくする。また、特別な対応が必要な子にはティーチングチームによるサポートをするといった具合です。面白いことに、LDの子に配慮したクラスでは、他のクラスより全体の成績が上がるという現象が出ています」。

しかし、千川助教授は、このモデル事業の限界も感じているという。現在のモデルを全校で行うとなると、かなりの数の専門家が必要となるからだ。「私の研究テーマは、専門家チームに頼らず学校内でいかに対応するかという体制づくりです。実際



Takashi Hoshikawa

教育学部助教授

千川 隆

にこれまでも学習に「まずき」のある児童生徒を教えてきたベテランの先生や特殊学級の先生など豊富な力量を持った教育者が現場にはおられます。その先生たちのノウハウをもっと活かし、学校内で情報を共有できるシステムをつくれれば、担任の先生だけが抱え込むことなくかなりの対応が可能になるはず」と分析する。

また、千川助教授は学生らと共に、LDの児童を集めた学習支援教室も行っている。そこで分かった学習支援教室へ還元していく考えだ。「学習の「まずき」が原因で、自分はダメだと思ひこむことによって、自尊心の低下が問題になるケースもあります。小学生のうち適切に対応することで、二次的な問題を防ぐことができる」といいますね」と、特別支援教育に期待をかける。

自分らしく生きる援助

発達障害がある子どもたちをユニークな方法で支援しているのは、熊本大学教育学部附属教育実践総合センターの高原

朗子 助教授だ。臨床心理士として障害者施設での勤務経験を持つ高原助教授は、14年前から心理劇という方法を使って広汎性発達障害の人々の心の解放や生活改善に取り組んでいる。自己表現やコミュニケーションに問題を抱える発達障害の人々に心理劇でアプローチするやり方は世界的にも珍しいと言われるが、高原助教授らのグループは、多くの臨床的成果を挙げている。

劇といっても衣装や舞台装置はなく、本人や同じ発達障害の仲間、臨床心理士やソーシャルワーカー、大学院生などがさまざまな役や観客となつて一緒に劇を作り、それについて互いに話し合うというものだ。「たとえば、何かにこだわる自閉症の特徴は、実社会では困ったこととして規制されることが多いですね。それを、劇という架空の世界で思いっきりやってみます。そうすると、日常生活ではそのこだわり行動が止まることがあるんです。また、辛いことや困った問題が起きたとき、その場面を劇にして振り返ることで、本人が自身や他人の気持ちに気づく。あるいは、周りもそういう時の対応策を見つけることができます」。障害を持つ本人にとっても、サポートする側にとってもさまざまな気づきがある。それが、心理劇の大きなメリットのようだ。

「もう一つの心理劇の効果は、ピアカウンセリングと違って仲間といっしょに体験できることです。いつも自分と違う子に囲まれ緊張している子どもたちが、同じ障害がある者同士だと、話し合えるし、リラックスできるんです」。仲間の問題を共有することで、別の子どもにも

も成長が見られるという。

「幼児の時から支援している子が大学生になり、そろそろ成人します。社会人になってからがまた大変。一生のおつき合いですね。今後の私のテーマは、中高年を迎えた発達障害の方の支援です。そして、心理劇で彼らが教えてくれたことを、プライバシーを守りながら、私が代弁者となつて社会に伝えていきたい」と、高原助教授は語る。

個性の一部でもあるこれらの障害を、発達障害としてとらえる時に、最も重要なことは、特別な配慮や支援を与えることが、かえって差別や偏見に結びついてしまうことを、絶対に防ぐということだ。現在、まだまだ、障害そのものに対する認知度が低いため、社会に対して啓発活動を進めること、そして、何よりも「人的、システムの、地域社会全体で支える枠組みづくりが必要」と、現場に立つ研究者たちは口を揃える。

様々な個性を持つ人も、障害を持つ人も、誰もが生きやすいユニバーサル・デザインの社会の実現への一歩は、私たち一人ひとりが、さまざまな障害について正しい理解を深めることから始まる。



Akiko Takahara

教育学部附属教育実践総合センター助教授

高原朗子



心理劇を体験する勉強会

声をつくり出す システムを開発

学問の喜びを発見し、夢を追いつける研究者たちに話を聞くこのシリーズ。今回は、音声合成システムの開発で知られる工学部の緒方公一助教を訪ねました。

仕組みを知りたい、作りたい…
子どもの頃からものづくりが大好き

子どもの頃、工作が得意だったという緒方助教。「昔からものづくりが大好きでした。どんな仕組みになっているのか知りたくて、よく、父親の古い時計などを分解しては、また組み立てようと奮闘したものです」。

漠然と理系への進学を考えていた高校時代、物理の教師が授業でパソコンを使ったデモンストラクションを行うのを見て、おおいに興味を持ちます。「当時、世間は情報化時代の入り口に立った

ばかりの頃で、まだパソコンはとても珍しく、興味深いものでした」。そこで、コンピューターを使う分野を目指そうと、熊本大学工学部へ進学します。

研究者への道は、4年生の卒業研究のテーマを決めた時から始まります。選んだテーマは、音声合成のための人間の舌の動きを計測する『磁気センサーの開発』。コンピューターで計測方法をシミュレーションし、センサーの配置を考案、それにもとづいて実際に装置を組立しています。「装置は、アルミや電気回路を使ってすべて手作りしました。緻密な作業だけに、思わぬトラブルもよく起こり、実験前日に急にセンサーが作動しなくなった

時は、泣きたくなりましたよ。苦労も多かったけれど、目の前で装置ができあがっていくのは、とても楽しいものでした。ある意味、プ

ラモデルを組み立てると似たような感覚かもしれませんね」。装置の製作と共に、計測で得た情報を処理するプログラムの開発も推進。まさに、物づくりとコンピューターの両方に携わることができ、願ってもない研究テーマに没頭しました。卒業後はテーマをさらに追究すべく、大学院へ。博士課程を修了後、同大学工学部の助手となり、磁気センサーの改良を続けました。

新たなテーマにステップアップ 研究成果に一喜一憂

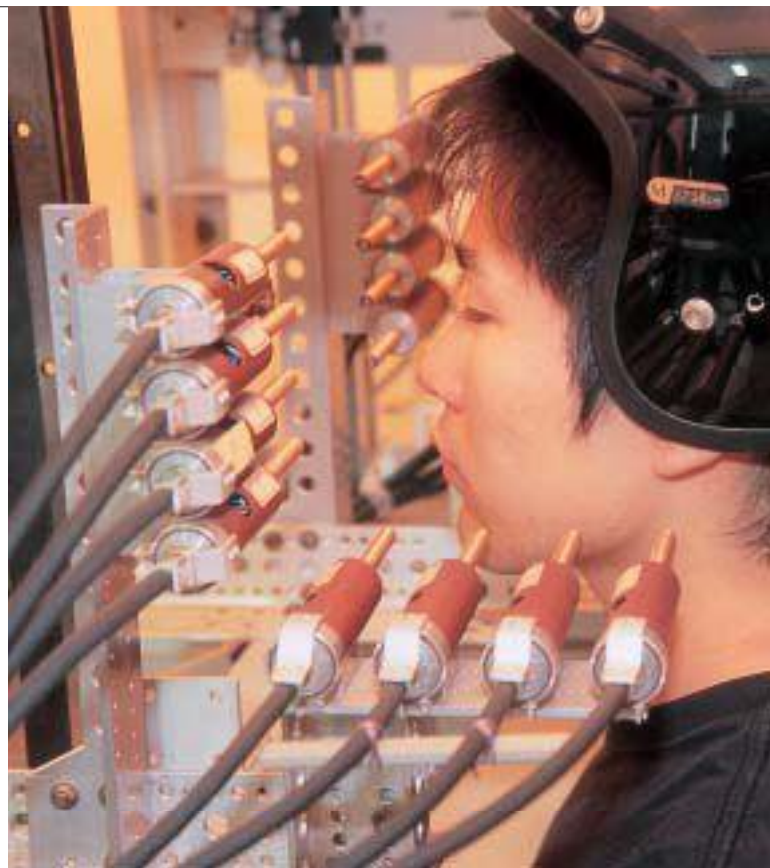
磁気センサーの開発が一段落した約5年前、今までの研究成果をベースに、次なるステップへ進むこととなります。磁気センサー開発のもともとの目的であった、音声合成システムの研究・開発に取り組むことにしたのです。現在の音声合成の主流は、録音した音声信号をつなぎ合わせて合成す



PROFILE

緒方公一（おがた・こういち）
1967年生まれ。熊本県出身。熊本大学工学部電気システム工学科助教。博士（工学）。熊本大学工学部卒業。同大学大学院自然科学研究科システム科学専攻博士課程修了後、同大学の電気システム工学科助手を経て、現在は助教を務める。専門は音声科学。音声合成システムと画像に関する研究・開発を行っている。

る方法。それとは根本的に違い、人間の話す機能をシミュレーションすることにより声をつくり出すというのが、新たな研究テーマです。口の中の動きを調べるMRIと、自身が開発した磁気センサーにより、人間が話す時に用いる口唇、顎、舌の動き(調音運動)を計測し、それをモデル化することで高度な音声合成の実現を目指しています。「例えば、男性、女性、子どもはそれぞれ口や喉の大きさが違うので、そこから発せられる声もまた違ってきます。そこで、口の動きや大きさをパソコンでモデル化し、自在にコントロールすることで、いろんな声や話し方の音声をつくり出すことができると考えています。つまり、人間の口の動きを真似する、パソコンを用いた音声合成システムを開発しているのです」。現在、人間が話すメカニズムは、

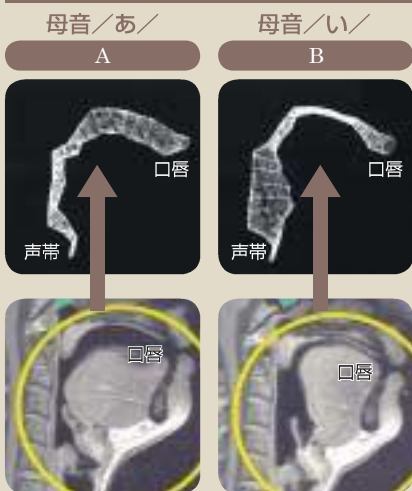


舌の動きを計測する磁気センサーシステム。磁石の周りには磁界が作られますが、その強度は計測位置によって変わります。この原理を利用して、口の中にある微小な磁石の位置をセンサーにより推定することで舌の動きを計測します。

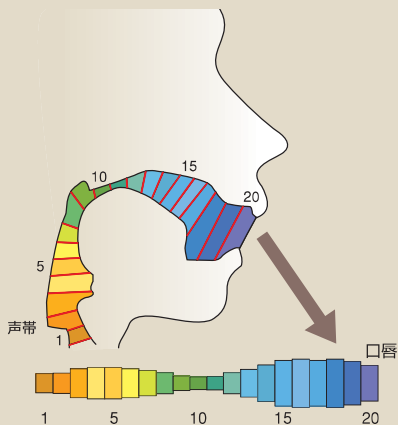
いですね。なにより、自分のアイディアが装置やシステムとして、形になっていくことが大きな魅力。ものづくりの醍醐味です」。

いまだ完全には解明されてはいません。しかし、未知の要素があるだけに、やりがいもあるといえます。「日々、試行錯誤の連続です。自分では『いい音が出た』と思っても、他の人から『よく聞き取れない』と言われて、がっかりすることもありますよ。ところが、偶然や遊び心から工夫したことが、思いがけずうまくいくこともあるんです。そんな時は、本当に嬉しいですね。自分のアイディアが装置やシステムとして、形になっていくことが大きな魅力。

声道のモデリングの説明



MRIによる断面画像データと声道モデル



声道を、その断面積が変化する音響管に見立てることで音声を合成します。母音の生成の場合は声道のせばめの位置(断面積が最小となる部位)が特に重要となります。

社会や人の役に立ちたい 新たなコミュニケーションツールを目指して

研究にまい進する日々を過ごすうちに、緒方助教の頭の中に、自然とあるビジョンが見えてきました。「特に大きなきっかけがあったわけではないのですが、この研究を始めた頃から、開発した技術を社会や人の役に立てたいと思うようになりました。今の私にとって、『役立ちのづくり』が研究のコンセプトです」。音声は人と人とのコミュニケーションにおいて大切なもの。そこで、音声合成システムを新しいコミュニケーション手段の1つにしたい、と力が入ります。「話すスピードや声の抑揚など、一人一人の話し方の特徴までもを反映できる、より人の発声に近い音声合成システムをつくりたいですね。そして、話すのが困難な方がスムーズに会話ができるように、インターフェイスとして実用化されるのが、私の夢。まだまだ長い道のりですが、実現を目指してがんばります」。



熊大群像

ユア・フレンドの学生たち

ボランティアで 不登校の子どもたちを サポート

不登校の子どもたちとのふれあいを目的に、ボランティア活動を行っている学生たちがいます。熊本大学教育学部と熊本市教育委員会が協定を結び平成14年度からスタートした『ユア・フレンド事業』の参加者たち。現在、2年生以上の教育学部生と教育学研究科院生の約100名が、不登校の子どもたちの自宅や学校などへ出かけ“友だち”になる活動を続けています。

子どもたちの笑顔が私の喜び

『ユア・フレンド事業』に参加しているのは、ほとんどが将来教員を目指す学生たち。「もともと子どもが好きだし、問題を抱えて困っている子どもの役に立ちたい」と参加動機を語るのは、教育学部3年の桑村聡子さん。桑村さんが担当しているのは、ごく親しい人以外との会話がうまくできず不登校になってしまった小学生。「私の活動は、いっしょに遊んで友達になること。まだ筆談でしか会話できませんが、最初の頃に比べると、はしゃいだりよく笑ったりしてくれるようになったのが嬉しいですね」と、週に1度の家庭訪問の手応えを感じています。



教育学部3年 桑村聡子さん

また、発達障害が原因で不登校になっている子どもたちの支援をしているのは、教育学部3年の面高有作さん。家庭や時には学校へも付

き添う活動を続けています。「きっかけは、大学1年のとき学外のボランティアで自閉症の子どもに出会ったこと。彼らは僕にはとてもかわらないような才能を持っていて、その独特の世界は素晴らしく豊かなんです。でも、普通学級では生きにくさがあることも事実。少しでも、そのサポートができれば嬉しいですね」。面高さんが付き添うことで、学校へ行けるようになった子どももいます。

周囲の人々の支援も大切

それぞれの子どものどういうサポートをするかは、教育委員会の担当者、学校、保護者と話し合いながら決めていきます。家庭や学校、市の教育センターのクラスに通って、子どもたちと一緒に過ごすのがボランティアの仕事。活動の中で生じる問題や悩みは、大学の担当教授などに相談するほか、定期的に開かれる研修会や先輩の体験談などを聞いて解決を考えます。

「子どもたちだけでなく、親や兄弟、同級生や先生など周りの人へのサポートも必要」と、活動を始めた学生たちは実感するといいます。「本人だけでなくお母さんも大きな不安



教育学部3年 面高有作さん

を抱えてらっしゃるので、お話を聞いてあげるだけでも元気になられます」と語るのは桑原さん。

問題を抱える子どもたちの親の会や医師などの専門家とも連携をとりながら、地域社会全体で子どもたちを支える体制づくりに取り組むという経験をしたことで、面高さんは、

「将来は、発達障害の子どもとその周りの人たちを支える仕事がしたい。今まで挫折ばかりだった僕が、大学へ入ってやっと夢を見つきました」と、大きなやりがいを感じています。

「一見サポートしてるようだけど、実は純粋な子どもたちに接することで、こちらが気づかされるのがいい。他の仲間たちにとっても、教師になる準備としていろんな子どもがいることを知るのは貴重なことだと思います」と語る二人。講義やゼミだけではできない体験から、学生たちは多くのことを学んでいるようです。

不登校生相手 相談の課題は
 熊本市が児童交換
 期本大の学生が熊本市
 内の不登校生の相談相手
 となるユア・フレンド
 事業の質実交換会が二十
 二日、熊本市千歳町の
 市教育センターであり、

不登校生相手 相談の課題は
 熊本市が児童交換
 期本大の学生が熊本市
 内の不登校生の相談相手
 となるユア・フレンド
 事業の質実交換会が二十
 二日、熊本市千歳町の
 市教育センターであり、

不登校生相手 相談の課題は
 熊本市が児童交換
 期本大の学生が熊本市
 内の不登校生の相談相手
 となるユア・フレンド
 事業の質実交換会が二十
 二日、熊本市千歳町の
 市教育センターであり、

不登校生相手 相談の課題は
 熊本市が児童交換
 期本大の学生が熊本市
 内の不登校生の相談相手
 となるユア・フレンド
 事業の質実交換会が二十
 二日、熊本市千歳町の
 市教育センターであり、

熊本日日新聞(平成17年1月23日掲載)

卒業生を
訪ねて

坂本善三美術館 学芸員 山下弘子さん

美術館は、自分の感じる心を 思いだし、育てる場所

阿蘇郡小国町にある「坂本善三美術館」。静かな山里の中、まるで昔話が聞こえてきそうな古い民家を改造したギャラリーでは、熊本が生んだ世界的画家坂本善三の作品のほか、さまざまな作家の展覧会が行われます。ここで学芸員として働く山下弘子さんは、美術館を日常の一部として、多くの大人たち、そして、子どもたちに親しんでほしいと語ります。



PROFILE

山下弘子(やました・ひろこ)
1993年、熊本大学文学部哲学科芸術学
コース卒業。故郷宮崎で3年間美術館に
勤務後、熊本大学の大学院で芸術学を専
攻。2000年から阿蘇郡小国町の「坂本善
三美術館」で学芸員として勤務。

幼い頃から、
日常の中に美術があった。

「学芸員になろうと思われたのは
いつ頃ですか？」

山下 高校生の時でした。父が中学
の美術の教師をしていたので、小さい
頃から画集を見たり美術館へ行っ
たりすることは日常的なこと、自然に
美術にかかわる仕事がしたいと思っ
ようになっただけです。大学進学も、芸
術学コースのあるところを探して熊
本大学の文学部哲学科に決めました。
「大学時代の思い出は？」坂本善三
美術館に就職されたいきさつは？



山下 哲学科ということもあり同

級生はみんなユニークな発想で楽し
かったですよ。お互いに違いはあつ
ても、それはそれで認め合う。常識に
捕らわれない友だちや先生方とふれ
あうことで、自分の価値観が大きく
変わりました。卒業後3年ほど宮崎
の美術館で働きましたが、もっと専
門的な勉強が必要だと感じ熊本大学
の大学院へ進みました。5年前ちょ
うど就職活動をしている時にここ
の募集があったんです。作家も美術
館自体も好きだったので、とても
ラッキーだったと思います。

「この美術館、坂本善三の魅力は。」



鑑賞教室の様子。子どもたちに先入観を与えないようあまり解説はせず、感じたことを言葉に出させることを心がけているそうです。

山下 この美術館は、明治初期の民家を移築したのですが、畳敷きなので座っても寝転んでもいいんです。一番の意義は、坂本善三という作家が暮らした風土の中でその作品を観てもらうこと。でも、畳敷きのせいか、不思議なことにどんな作家の作品を展示しても、とても身近に感じられるんです。今までも、棟方志功のようなこの雰囲気にはびつたり作家からアンディ・ウォーホルのような現代美術の作家のものまでいろんな作品を展示しましたが、みなさんびっくりされるほどじっくり馴染むんです。ウォーホルの時は、熊大の芸術学コースの学生さんたちがワークショップを企画してくれました。それから毎年、一緒にワークショップをやっています。私を感じる善三の魅力は、包容力です。声高な自己主張をぐっと抑えながら、こちらが振り向けば、いつでも、どこでも、誰でも受け入れてくれる。そんな懐の深

い存在感が好きです。

子どもたちに
ちゃんと感じる心を育て欲しい。

—小国の暮らしはいかがですか？

山下 人はやさしいし、お水も野菜も美味しいし、星はきれいだし、住環境はとてもいいですよ。それに、町の規模も、美術館のある環境として理想的だと思います。たとえば、小学校への出前教室や美術館へ来てもらう鑑賞教室なども、生徒数が町全体で五百人ほどなので全ての学校の子どもたちに体験してもらうことができます。先生や生徒の顔も分かるし、子どもたちの成長も見ることができ

ます。美術を特別なものとして構えることなく、日常的なものとしてふれてもらえるのがいいですね。毎日の暮らしの中



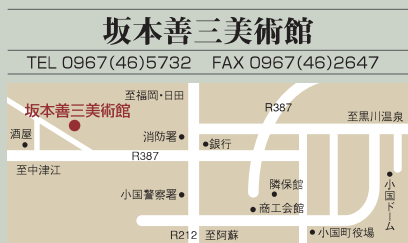
で、ご飯が美味しいなど感じることもや夕焼けがきれいだなと感じること、美術館で絵を見ることとはかけ離れたことではないと思います。日々誰もが何かを心に刻んでいるはず。ふだんはいちいち言葉や形にしてはいないけれど、そんな感じる心を思い出してもらうのが美術館という場所なんです。子どもたちには特に、ちゃんと感じて、ちゃんと考えられる感性を育てたいと思います。

—後輩たちへのメッセージをお願いします。

山下 自分が何のために仕事をする



かという信念を持つことが大切だと思います。たとえば学芸員の場合、就職試験では美術史や芸術に関する知識、語学力などが求められます。でも、仕事を始めたら、美術館の役割やその先が見えていないと厳しいんです。自分の仕事の意義は何か、何がしたいのか。答えは、昨日、今日では見つからないと思うので、日頃からじっくり考えておくといいのではないのでしょうか。



留学生のそばにいて支える

頼れるチューターが存在

熊本大学では多くの外国人留学生が学んでいます。渡日して間もない留学生には、チューターがついてサポートをしています。週に数回交流し、学習面はもとより日常生活や人間関係などのアドバイスをを行うシステムですが、仲良くなれば、親友同然。先日、行われた大分への留学生見学旅行では、1泊2日を一緒に過ごし、さらにお互いが理解でき、絆が深まったようです。今回、2組の留学生とチューターに、お話をうかがいました。



来熊初日に出迎え。その日のうちに友達に

OLIVER BURKIEWICZ(オリヴァー・ブリキトウィツ)ドイツ出身。2004年10月から文学部へ留学

●チューター 森高敬祐 大学院文学研究科2年生

正月に、広島の僕の実家に一緒に行ったら、僕の家族とすっかり仲良くなって…。

オリヴァー 家族のようになり、彼のお父さんにいろんな日本語を教えてもらいました。

森高 どっちが息子なんだか、嫉妬しちゃいますよ。春休みにも、彼1人で広島に行く予定なんですよ。

オリヴァー それに、京都や大阪、愛媛もまわり、旅行を通して日本を感じてきたいと思っています。

ー見学旅行で印象に残ったことは？
 オリヴァー 特に旅館では、日本の風情を感じることができました。

森高 浴衣や露天風呂は初めての経験だったそうです。

オリヴァー 浴衣を着たら、僕には短すぎて思わず笑ってしまいました

ー担当チューターへの第一印象は？
 オリヴァー 最初から気が合いました。僕が日本に着いた日、彼が熊本空港に迎えに来てくれて、その日の夜には一緒に居酒屋へ。すぐに友達感覚になれたんです。

ーチューターになった動機は？

森高 僕は以前2年半程、ドイツ留学をしていた経験があり、その際、ドイツの人たちにとっても親切にしていたいただきました。その恩返しに、ドイツからの留学生のお手伝いをして

いたと思います。また、留学して

たおかげで、ドイツ人の感覚が理解できることが、オリヴァーとのコミュニケーションにも役立っています。1どのようなことをサポートしてもらっていますか？

オリヴァー 作文の添削や日本の一般的な暮らしなどについて、教えてもらっています。特に文法をわかりやすく解説してくれるので、助かっています。

森高 逆に僕が、ドイツを題材にした論文を書く際、オリヴァーにいろいろアドバイスをしてもらいました。



左から森高さん、オリヴァーさん



た。大きいサイズのものに替えても
らって、浴衣に下駄を履き、別府の
街を散歩しました。露天風呂に入っ
たら、雪が降ってきたんですが、た
め息が出るほど美しかったですね。

森高 雪見風呂なんて、僕らでも
めったに体験できないから、ラッ
キーでした。
オリヴァー 本を読んでいるだけよ
りも、ずいぶん勉強になりました。

会ってみると共通点が多くて

柳美操(リュ・ミラ)韓国出身。2004年10月から法学部へ留学

●チューター 森綾香 法学部2年生

「お互いコミュニケーションはスミ
ズですか？」

森 それまで留学生と接する機会が
なかったのが、最初は自分にチュ
ーターが務まるか自信がありません
でした。でも、身構えることなく友
達として接しようと思ったんです。

リュ 私も森さんに会う前は、日本
語にも自信がなく、きちんと交流で
きるかどうか、どんな人なのだろう
かと少し不安でしたが、会ってみ
ると共通点が多くて、いい友達にな
れそうだと安心しました。

森 そうなんです、考え方や行動パ
ターンやペースがよく似てるん
ですね。だから、一緒にいてとても
ラク。普段は週に2、3回、時間を
決めて放課後に会うようにしてい

す。
リュ 森さんとは同い年の気安さ
あり、遠慮せずになんでも聞ける
んです。



左からリュさん、森さん

「学習面ではどのようなサポート
を行っていますか？」

森 基本的に、日本語だけで話すよ
うにしています。なるべく標準語を
使うようにしているんですが、リュ
さんは日本語の上達が早くて、最近
では彼女の方が時々、熊本弁を話す
んですよ(笑)。

リュ 日本語も、例えを交えて分り
やすく教えてくれます。おかげで上
達し、新学期からは、ワンランク上
の日本語クラスに挑戦しようと思っ
ているんです。また、専攻している
法律の勉強も積極的に手伝ってくれ
ます。森さんが作ってくれた刑法の
授業のレジメは、大変役に立ちまし
た。

森 刑法は、日本人にとって
も難しい言葉が多いので、か
みくだいた言葉で説明できれ
ば、と思ったんです。レジメ
作りのために、分りやすい解
説のテキストを探して何冊も
読んだので、自分の勉強にも
なりました。

「勉強以外のサポートは？」
リュ 先日は、アルバイトの
申し込みをするために、市
の国際交流会館へ連れて行っ
てもらいました。その他、一
緒に近くの商店街に買い物に

行ったり、日常生活でもいろいろサ
ポートしてくれています。

森 自分もし留学したら、どんな
ことが困るだろう？とリュさんの気
持ちになって考えるように心がけて
います。

「見学旅行では何が1番印象に残
りましたか？」

リュ 高崎山では、今まで見たこと
もないたくさんの猿を目の当たりに
して、とても驚きました。最初は少
し怖くも感じたのですが、かわいい
小猿に森さんと2人で見入ってしま
いました。

森 長い時間、一緒に過ごせたお
かげで、ますます仲良くなれたし、お
互いをより知ることができたように
思います。

留学生は2人とも母国に帰った
ら、自分がチューター役を買って出
て、自分がしてもらったように、外
国から来た学生のサポートをしたい
と話していました。

チューター制度を通じて、双方が
相手の立場に立って考え、行動する
ことで、お互いに向上し合えるいい
関係を作り上げているようです。国
際交流とは、こんな1対1の友情を
束ねたものなのかもしれません。

大学院入試日程（予定）

選 抜 区 分	願書受付期間	試 験 日	合格発表
文学研究科(修士課程) 社会人特別選抜を含む 《第1期・秋季日程》	9月上旬	9月下旬	10月中旬
文学研究科(修士課程) 社会人特別選抜を含む 《第2期・春季日程》	1月下旬	2月中旬	2月下旬
教育学研究科(修士課程)	8月中旬	9月中旬	10月中旬
法学研究科(修士課程) 社会人特別選抜及び外国人 留学生特別選抜を含む《第1期》	9月上旬	9月下旬	10月中旬
法学研究科(修士課程) 社会人特別選抜及び外国人 留学生特別選抜を含む《第2期》	1月中旬	2月中旬	2月下旬
医学教育部(修士課程) 推薦入学	6月下旬	7月上旬	7月下旬
医学教育部(修士課程) 《秋季日程》	7月下旬	8月下旬	9月中旬
医学教育部(修士課程) 《春季日程》	1月上旬	1月下旬	2月上旬
医学教育部(博士課程) 社会人特別選抜を含む 《秋季日程》	7月下旬	9月上旬	9月下旬
医学教育部(博士課程) 社会人特別選抜を含む 《春季日程》	1月上旬	2月中旬	2月下旬
薬学教育部(博士前期課程) 推薦入学	6月下旬	7月中旬	7月中旬
薬学教育部(博士前期課程) 外国人特別選抜及び 社会人特別選抜を含む	7月下旬	8月下旬	8月下旬
薬学教育部(博士後期課程) 社会人特別選抜を含む	1月下旬	3月上旬	3月上旬
薬学教育部(博士前期課程) 10月入学 外国人特別選抜及び社会人特別選抜を含む	7月下旬	8月下旬	8月下旬
薬学教育部(博士後期課程) 10月入学 外国人特別選抜及び社会人特別選抜を含む	7月下旬	8月下旬	8月下旬

選 抜 区 分	願書受付期間	試 験 日	合格発表
社会文化科学研究科(博士課程) 社会人特別選抜及び外国人 留学生特別選抜《秋季日程》	9月下旬	10月中旬	11月上旬
社会文化科学研究科(博士課程) 社会人特別選抜及び外国人 留学生特別選抜を含む《春季日程》	1月下旬	3月上旬	3月上旬
自然科学研究科(博士前期課程) 推薦入学	5月下旬	7月上旬	7月中旬
自然科学研究科(博士前期課程) 社会人特別選抜を含む	7月下旬	8月下旬	9月上旬
自然科学研究科(博士前期課程) 外国人留学生特別選抜	2月上旬	2月下旬	3月上旬
自然科学研究科(博士前期課程) 学部3年次を対象とする選抜	2月下旬	3月上旬	3月上旬
自然科学研究科(博士後期課程) 社会人特別選抜を含む	7月下旬	8月下旬	9月上旬
自然科学研究科(博士後期課程) 10月入学 社会人特別選抜、外国人留学生 特別選抜及び帰国子女特別選抜を含む	7月下旬	8月下旬	9月上旬
法科大学院 法曹養成研究科	10月下旬	第1次選抜 11月下旬	12月上旬
		第2次選抜 12月中旬	12月中旬
		法律科目試験* 1月上旬	1月中旬

* 法科大学院の法律科目試験については、第2次選抜で合格し入学手続を完了した者のうち、
2年短縮コースを希望する者に課します。
※ 予定が変更されることもあります。ホームページ等でご確認下さい。

お問い合わせ

熊本大学学務部入試課 〒860-8555 熊本市黒髪2丁目40番1号
TEL 096-342-2146 FAX 096-345-1954
E-mail nyushi@jimu.kumamoto-u.ac.jp
熊本大学ホームページ <http://www.kumamoto-u.ac.jp/univ-j.htm>

学生2団体・1個人を表彰



「柔道部」

学業成績優秀者や課外活動・社会活動において優秀と認められた団体や個人を表彰する学生表彰が3月8日に行われました。

第26回全国国公立大学空手道選手権大会において団体3位入賞した「空手道部」、第26回九州ジュニア柔道体重別選手権大会

（81kg）において優勝した「柔道部 杉山太介君」、40年間人形劇や児童文化財をととして地域社会に貢献した「青い鳥」の2団体・1個人について、崎元学長、足立副学長、長木事務局長、石橋学務部長、顧問教員他関係者が出席し表彰式を行い、学長から表彰状及び記念品の贈呈が行われました。



「空手道部」



「青い鳥」

平成17年度熊本大学公開講座

● スキルアップしよう！

講座名 陸上競技教室 ～速く走る秘密～

開催日 平成17年7月17日(日)～平成17年9月3日(土)

会場 熊本大学武夫原グラウンド(陸上競技場)(雨天時は黒髪地区体育館)

募集期間 平成17年5月2日(月)～平成17年6月20日(月)

募集人員・対象者 40名・小学生、中学生、クラブ指導者や教員等

受講料 8,200円(保険料、大会参加料は別途徴収いたします)

講座内容 大学が有する技術や知識を活かし、運動の基礎である「走」「跳」「投」の要素を含んだ練習をいろいろの器具を使いながら工夫した指導内容で行います。子どもたちには、速く走る秘密を楽しみながら体験、理解してもらい、また、指導者には子ども達への具体的な指導場面を通して、その効果的な指導法の研修ができる機会を提供し、陸上競技の特性を子ども・指導者・大学が一体化し実践します。

講座名 リーダーシップ・トレーニング

開催日 Aコ ス:平成17年7月14日(木)、7月15日(金)、10月14日(金)
Bコ ス:平成17年8月11日(木)、8月12日(金)、11月10日(木)
Cコ ス:平成17年9月8日(木)、9月9日(金)、12月8日(木)

会場 教育学部附属実践総合センタ

募集期間 Aコ ス:平成17年6月1日(水)～平成17年6月22日(水)
Bコ ス: // ～平成17年7月20日(水)
Cコ ス: // ～平成17年8月17日(水)

募集人員・対象者 各コ ス30名・組織・団体のリダ **受講料** 8,200円

講座内容 リーダーシップと集団に関する科学的研究を基礎にして、参加者のリーダーシップ向上と人間関係改善のための知識・技術を身につけます。Aコース・Bコース・Cコースの3コースありますが、すべて同じ内容です。

講座名 ゼミナール 地方自治をめぐる諸問題

開催日 平成17年6月11日(土)～平成17年8月6日(土)

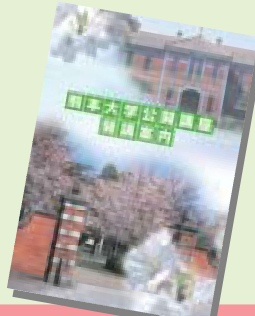
会場 生涯学習教育研究センタ

募集期間 平成17年4月1日(金)～平成17年5月20日(金)

募集人員・対象者 15名・公務員、一般社会人

受講料 6,200円

講座内容 これからの新しい時代を担う地方自治体職員のための政策演習講座です。例えば市町村合併問題、地域政策のあり方、コミュニティ・ビジネスの振興などを、具体的に考えます。



詳しくは、開講案内パンフレットでご確認ください。無料配布していますので、ご希望の方は地域共生戦略室へお問い合わせください。

● 文化芸術・心ゆたかに

講座名 “映画”の見方・考え方

開催日 平成17年10月15日(土)～平成17年11月19日(土)

会場 文学部法学部棟 A 1教室

募集期間 平成17年8月15日(月)～平成17年9月16日(金)

募集人員・対象者 25名・一般社会人、大学生、高校生

受講料 7,200円

講座内容 映画百十年の歴史を振り返りながら、過去の名作が今に伝えるものは何か、現在人びとの心を捉えている映画の底にあるものは何かを、受講生の方々とともに考えていきます。

講座名 ワグナー芸術への招待

開催日 平成17年7月9日(土)～平成17年9月24日(土)

会場 文学部法学部棟 A 3教室

募集期間 平成17年4月4日(月)～平成17年6月17日(金)

募集人員・対象者 25名・一般社会人、大学生

受講料 9,200円

講座内容 ワグナーの作品を順次取り上げて、文学(台本)と音楽の両面からワグナー芸術の全体的な理解を目指します。今年度は、畢生の大作《ニーベルングの指環》4部作の第1部《ラインの黄金》と第2部《ヴァルキューレ》の解説と鑑賞を行います。

講座名 ドイツ文化への招待

開催日 平成17年5月14日(土)～平成17年7月23日(土)

会場 大学教育センタ 棟 B 201教室

募集期間 平成17年4月1日(金)～平成17年4月22日(金)

募集人員・対象者 50名・一般社会人、高校生

受講料 7,200円

講座内容 本年度に全国で実施される「ドイツ年」を機会にし、熊本大学のドイツ語担当者、各専門分野の研究成果を分かりやすく紹介しながら、それぞれの視点からドイツ文化へ案内します。

講座名 ハーンと漱石

開催日 平成17年6月25日(土)～平成17年7月23日(土)

会場 五高記念館

募集期間 平成17年5月2日(月)～平成17年6月3日(金)

募集人員・対象者 20名・一般社会人、大学生

受講料 6,200円

講座内容 熊本に所縁の深い二人の文豪ラファディオハーンと夏目漱石の生涯と作品をたどって二人の生い立ちと時代背景を考えながら作品の背景にあるものを読み解いていきます。

講座名 「陶芸教室」～つくる喜びを求めて～

開催日 平成17年5月14日(土)～平成17年12月10日(土)

会場 附属養護学校 陶工室

募集期間 平成17年4月1日(金)～平成17年4月22日(金)

募集人員・対象者 30名・一般社会人

受講料 10,200円(別途教材費5,000円程度)

講座内容 陶芸に関する基本的な知識や技能の習得をめざし、広く市民一般に開かれた学校づくりを推進します。

申し込み方法
パンフレット上のはがき、又は官製はがきに必要事項を記入のうえ、お申し込みください。なお、FAX・Eメールによる申し込みも受け付けます。

※必要事項
①希望講座名 ②氏名(フリガナ)
③年齢 ④〒住所 ⑤電話番号

生涯学習教育研究センタ

熊本大学総務部総務課地域共生戦略室

問い合わせ先

〒860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号 TEL.096-342-3121 FAX.096-342-3110
E-mail:sos-tiiki@jimu.kumamoto-u.ac.jp URL:http://www.ife.ong.kumamoto-u.ac.jp



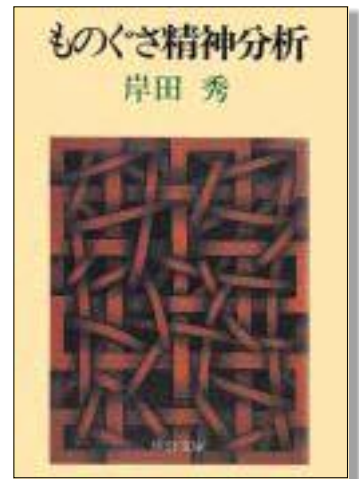
お薦めの一冊

『ものぐさ精神分析』 岸田 秀著 中公文庫



萩野 蔵平 文学部教授

人間は不思議な生き物です。たとえば昨今の空前の「ペットブーム」。なぜ人間はこれほどまでに動物を飼いたがるのか。人間以外に動物を飼う動物は存在しません。また、幼児を虐待したり、幼児を放棄してしまう人たちがいます。動物は「子育てをしないことができない」のに、それが人間にはできるのはなぜですか。今回取り上げる岸田秀著『ものぐさ精神分析』は、今から20年以上前のものですが、こういった問題を考える際にはとても参考になります。彼の考え方は「一切は幻想である」、つまり「唯幻論」というものです。人間は本能が壊れた動物である。本能が壊れるというのは、行動パターンが壊れただけでなく、世界像も壊れたということの意味する。その結果、人間は、他の動物と違って世界と自然に対応することができなくなってしまった。しかし、それでは人間は生きていけないので、「幻想」を介在させて対応せざるを得ない。それが文化の起源であり、言語の起源である。彼の考えは、ごく大雑把にまとめるとそんなふうになるかと思います。そう考えると、「ペットブーム」は、人工的な世界に住む人間の自然に対する疎外感・孤立感を背景にしていると考えられますし、「子殺し」についても、「母性本能」といったものは壊れてしまい、頼みの「母性愛」という文化の産物もうまく機能していないことの反映ではないのか、と思えてくるのです。とりわけ「唯幻論」で私に興味深く思われた点は、「言語起源論」に関するもので、言語は、サルの言葉が進化したものではなく、本能が壊れたために必要に迫られてできたものであるという議論です。そうすると、もし、本能が壊れなかったら、言語能力は獲得できなかったのであって、つまりは、人間は本能が壊れたからこそ人間になったというわけです。同様の手法により、本書ではさらに、性行動や性愛といった現象も、本能というよりは、それが壊れたあとに再構築された文化の産物、つまり「幻想」であることが明らかになっていきます。その筋でお悩みの方は是非一度本書を手にとってみてください。また、同著者による『続ものぐさ精神分析』もどうぞ。



熊本 新哲学の道

「立田自然公園～泰勝寺～」を歩く



熊本大学黒髪北キャンパス東の通りを北へ向かって歩くと、立田山のふもとに「立田自然公園」があります。藩主細川家の菩提寺泰勝寺の跡を公園に整備し開放しているもので、よくいえば落ち着いた佇まいの静かな場所です（メインが、初代藤孝夫妻および二代忠興夫妻の墓です）。筆者が熊本へ移り渡鹿に住み始めた頃、子連れで訪れたことがあります。「自然公園」の名称から「遊具のある公園」をイメージし訪れたのは失敗。子どもと遊ぶ場所ではなく、大人が歴史・文化に触れながら、しっとりと癒される場所です。

公園内には、前述四名の墓「四つ御廟」や、風流を感じさせる茶室「仰松軒」、緑のビロードが敷かれた如き「苔園」などがあります。それらの間を歩くと確かに、自然の空気（雰田気）に包まれ、喧騒を忘れてゆきます。宮本武蔵の供養塔もあり、霊巖洞や武蔵塚公園とともに、武蔵ゆかりの観光コースの一つともなっています。

(教育学部 佐藤毅彦)



昨年12月オープンの羽田空港第二ターミナルビル。第一印象は「たくさん歩かされるなあ」であった。到着ゲートにもよると、とにかく出口まで長い。出発と到着の流れが分離されていて風景が単調（到着客にはショップも見えない）なことも、長さだけを強く印象づける結果になっているようだ。さいわい、今でもバス送迎は健在。第一ターミナルの頃はバスに当たると「冷遇されている」と感じたが、今では「たくさん歩かされるぐらいなら、バスの方がよほどラク」と歓迎するようになった。

しかし空港の「遊び場としての魅力」という点では、羽田はやはり大したもの。熊本空港は大きく見劣りがする。ショップやレストランは貧弱。ホテルが隣接するでもなく、交通も便利とはいえない。屋上送迎デッキへの入場が有料というのも驚きである。「来てもらい、楽しんでもらい、そして繰り返し来てもらう」というコンセプトになっていないのである。県全体の観光にも同じことを感じるが、こうした本質的な部分に手をつけず、観光客の減少分を夜間発着の貨物便で補おうなどとしては、魅力的な訪問地にはなり得ないと思う。法人化された大学の経営にも、同じようなことがいえるはずであり、大胆な発想が必要である。

(編集委員：佐藤毅彦)

編集委員

文学部	水元豊文
教育学部	佐藤毅彦
工学部	緒方公一
発生医学研究センター	糸 和彦
生涯学習教育研究センター	上野真也(委員長)

事務局/総務課広報室
文責/熊大通信WG



表紙/板井榮雄
キャンパスの四季を鮮やかに映すガラス張りの工学部百周年記念館。

熊本大学公式ホームページ
<http://www.kumamoto-u.ac.jp/univ-j.html>

熊大通信では、皆様のご意見・ご感想をお待ちしております。

● 宛先 ●

熊本大学総務部総務課広報室
〒860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号
TEL: 096-342-3119 FAX: 096-342-3110
sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

心停止56時間 死から奇跡の生還
劇症型心筋炎―本連市の山下美佳さん
大きな後遺症なし
熊本大 懸命の治療実る
1/3 熊本日日新聞

水俣病研究 力注
熊本大の2教授 来月退官
23年かけ資料集 現地調査を再開
2/25 熊本日日新聞

ゆめつみの教育強化
熊本大 新工学部カリキュラム
2/27 熊本日日新聞

2/11 熊本日日新聞

1/26 熊本日日新聞

1/10 熊本日日新聞

産学官連携の拠点に
熊本大学
企業向けセミナーなど研究アピール
大学間競争で生き残りを

大脳皮質の命令系統解明へ/てんかん治療に応用も
玉巻伸章氏
フロントランナー

2005.4

O P E N



私たちは安全・安心で住みやすい

地域社会づくりを提案します。

政策シンクタンク

熊本大学政策創造研究センター

E-mail: gjk-somu@jimu.kumamoto-u.ac.jp